会　報

無肥研だより

第 30 号

2026 年 11 月 1 日　発行



実りの秋を迎え、会員の皆様には収穫や出荷準備など、お忙しい日々をお過ごしのことと存じます。今号では、『無施肥無農薬の作物栽培』出版記念シンポジウムをはじめ、これまでの「無肥研だより」では取り上げる機会の少なかった行事や活動報告など、盛りだくさんの内容をお届けいたします。皆様の今後の活動の一助となれば幸いです。

1．近畿作物・育種研究会例会での発表　2026.7.11



発表する家田氏

キャンパスプラザ京都において、近畿作物・育種研究会の第 200 回記念例会として、記念講演と一般講演が行われました。その一般講演において、無肥研メンバーより丸田信宏らが「長期無施肥無農薬栽培水稲の生育・収量・品質の特徴」、家田善太らが「長期無施肥無農薬栽培水田における冬期湛水・中干しの有無が生育および収量に及ぼす影響」と題して発表を行いました。両発表とも、これまで無肥研研究報告会において継続的に報告してきた無施肥栽培水田において数年の調査から得られた成果を紹介しました。参加されたある先生から「今後もこのような学会や研究会で発表を続けてほしい」と励ましの言葉をいただきました。

なお一般講演ではその他に近畿大学などの研究者による発表も数多く行われ、さまざまな研究のテーマや手法に触れることができました。その中で、私たちが取り組む無施肥栽培が特異性の高い研究対象であることを改めて認識するとともに、多様な視点から研究を見つめ直す貴重な機会となりました。

その後の記念講演では、日本作物学会および日本育種学会の諸先生方による講演が行われました。特に作物学会からの記念講演では、日本作物学会元会長として白岩立彦・無肥研理事長が「これまでの作物学」、現在の日本作物学会長として本間香貴・無肥研副理事長が「これからの作物学」と題して講演され、作物学研究の歴史と将来について知見に富むお話がありました。

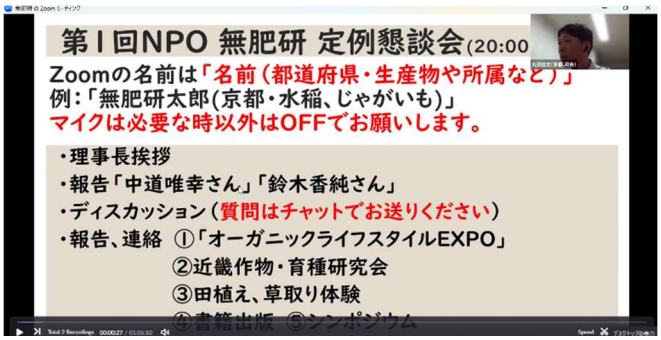
まだまだ無施肥栽培の認知は高くはないと思います。今後も研究成果を学術的な場で発信しながら、無肥研の活動を普及していきたいと思っております。　（NPO 無肥研　家田善太）

2．「定例懇談会」でお会いしましょう

無肥研では、Zoom を用いて生産者同士や流通関係者の皆様が交流し、これまでの貴重なご経験を広く共有できる場として「定例懇談会」を開催することとなりました。この懇談会を通じて、全国の会員同士の横のつながりをさらに広げていただければと願っております。

この会は、基本的に毎月 22 日の 20 時から約 1 時間にわたり開催しております。（2026 年 12 月はお

休みです。）本年１月から少しずつ準備を重ね、7月から会員の皆さまに周知するに至りました。これまでに、滋賀県で水稲を栽培されている中道農園の中道唯幸様、埼玉県でごまを栽培されている香胡園の鈴木香純様、石川県でレンコンを栽培されている魂のれんこん 岡山農園の岡山哲章様からお話を伺いました。それぞれの栽培方法や課題克服の工夫についてお聞きした上で、率直な意見交換を行っており、今後もさまざまな会員の方にお話していただく予定です。



「定例懇談会」Zoom画面

生産者、流通関係者、研究者、消費者など、異なる立場の会員同士がざっくばらんに話し合える点がこの会の大きな魅力です。栽培のちょっとした工夫や販路の悩み、質問など、話題は何でも大歓迎です。毎回どのようなお話が聞けるのか楽しみにされる会員様も少しずつ増えてまいりました。

会員の皆様が交流を深め、互いの取り組みに刺激を受ける場として今後も育ててまいりますので、ぜひお気軽にご参加いただき、また遠慮なく要望やご意見をお寄せください。なお、ご参加は無肥研の正会員・賛助会員の方に限ります。メールアドレスお届けの会員様に Zoom 参加用の URL をお送りしています。メールが届いていない方で参加ご希望の会員様は（mail@muhiken.or.jp）までご連絡ください。

（NPO 無肥研 伊吹克也）

３．伊藤農場（北海道）での実地体験　2026.8.23～26

北海道の広大な圃場で何種もの作物の無施肥無農薬栽培をたったお一人で実践されている方がおられ、是非勉強に行きませんかと小林理事より提案がありました。


左から３人目が佐藤氏

北海道の無施肥無農薬栽培には強く惹かれるものがあり 2026 年 8 月 22 日から 27 日の６日間（中４日間）を有志３人と共に北海道常呂郡訓子府町にある伊藤農場の佐藤哲義さんにお世話になる事となりました。いよいよ当日となり、期待と不安が交互するなか、飛行機を降りレンタカーで訓子府へ向かいました、伊藤農場に向かう途中、視界に収まりきらない、地平線まで続く畑が展開しており、これが北海道の農業か…とんでもないところに来てしまったと息をのみました。初日の夜に佐藤さんが我々の宿舎にきてくださり、今後のヒアリングを兼ねたミーティングを行っていただき、次の日より佐藤さんの圃場で作業をさせていただく事になりました。

圃場に入る前には一礼して臨むことをお話くださり、圃場を尊い場所と位置付けられているのだと感じました。時期的に畑での作業は少ないものでしたが、佐藤さんの仕事は無限にあり、草刈りやハウスの解体、砂利引き等を手伝わせてもらいました。佐藤さんは休憩時間に色々なお話をしてくださり、お父上である故伊藤秀幸様から自然栽培を引継がれ１３年になる事、圃場は訓子府に４カ所点在し、合わせて約２０ヘクタールの面積を無施肥・無農薬で行い、播種から生育中の管理、収穫出荷まで全てご自分でされ、全国の顧客へ届けておられます。伊藤農場は機械作業がほとんどで、機械は慣行栽培を前提として設計されているので、時に大胆に改造されることも。またご自分でメンテや修理をされておられますので、季節に関係なく年中お忙しいというわけです。佐藤さんは慣行農業での不安は科学的にアンサーがでているが、自然栽培は不安と隣り合わせで、手探りの試行錯誤を繰り返している



事をお話くださいました。４日間作業させていただき、改めて佐藤さんの広大な圃場の前に立つとき、その圧倒的美しさに鳥肌が立ちました。疫病や虫害に弱い馬鈴薯や小麦を初め・タマネギ・玉蜀黍・豆類・大根・人参・かぼちゃが全て無施肥無農薬で健康に育っている感激と無施肥無農薬の可能性を胸に抱きつつ、佐藤さんをはじめ、いつも心づくしのおやつをご用意くださったお母さまと北海道に感謝し帰路につきました。飛行機内、心地よい疲れのなかで佐藤さんが話されたことを思い出しました。「おやじとの約束は１０年は続けてくれなので、もう義理は果たした。何時辞めてもいいのです、才能の無い素人です」と言われましたが、いえいえ佐藤さん、農業に全身全霊真摯に向き合っておられる篤農家のお一人であられることは佐藤さんの作物が証明してましたよ。（NPO 無肥研　倉島次郎）

４．圃場見学会　2026.9.6

2026 年 9 月 6 日に無肥研主催により京都府、福井県、滋賀県を巡る圃場見学会が行われました。見学会には堀江武名誉顧問、白岩立彦理事長をはじめ 23 名の方の参加がありました。

最初に京都府宇治市にある無肥研管理水田、畑地を訪れ、見学に先立ち、白岩理事長より「ご存知と思いますが『無施肥無農薬の作物栽培』の本が上梓されました。疑問点などを大いに出していただいてこれからの糧にしていただければと思います」とお話がありました。小林理事より「小倉圃場は栗東圃場から土を移動した栽培面積 10 アールの部分は 1951 年から無施肥の土壌での栽培です。隣接する栽培面積 25 アールの水田と畑地 10 アールは 2003 年からです。水稲の栽培品種はベニアサヒです」と説明があり、見学しました。稲は緑の穂が出そろったところでした。堀江名誉顧問、白岩理事長から「きれいな稲ができていますね」とコメントがありました。

堀江名誉顧問が畑地のナスを見て、植物体は小さいわりによく実っていますとお話がありました。水田の土の質感を手に触れて体感されている方もおられました。

昼食は福井県でいただきました。続いて同越前市にある丸山氏グループ水田を見学させていただきました。勝見さゆ里様から「栽培面積 7 アール無施肥年数 30 年になります」と紹介いただきました。「草が生えていない。何でこんなきれいな田圃になるのですか」との質問に対し「機械除草と手取除草をたくさんしました」と説明がありました。隣の慣行水田は全面倒伏しており、その様子を見た見学者の方は、無施肥栽培は無事であることに驚いておられました。


丸山氏グループ水田

又、越前市で無施肥栽培をされている尾形様より今年稲刈りをされた結果、「去年は 5.5 俵で今年は 5 俵でした。草でやられて減収になった。来年度の反省点ができた」と報告いただきました。

その後、滋賀県野洲市にある中道農園の水田を見学させていただきました。無施肥栽培の総面積 10 ヘクタールのうち、今回は 1.2 ヘクタールの水田を見せていただきました。栽培品種はコシヒカリです。中道様より「無施肥栽培を始めるきっかけは父親が農薬で体調を壊し、僕も農薬で体調を壊したこと」とお話がありました。又栽培管理では冬耕（浅耕）冬期湛水、アイガモロボを投入されています。収量を増やす栽培管理を探求しておられました。


自身の水田の前で説明する
中道農園の中道氏（左）

最後に、堀江名誉顧問より「現在は日本の農地の 4 分の 1 は有機栽培（無施肥栽培も含む）に変えましょうと政府が言い出してきた時期であって、私たちの無施肥無農薬栽培はそういった、これからの日本農業に非常に役立つことが多いだろうと思います」とのご挨拶がありました。

無施肥栽培の美しい圃場の見学を快く受け入れていただいた丸山様、中道様、ありがとうございました。

（NPO 無肥研　寺田賀一）

５．書籍出版記念シンポジウム　2026.9.20

2026 年 9 月 20 日午後２時より、書籍『無施肥無農薬の作物栽培』の出版記念シンポジウムをレイメイホールで開催し、１６２名の会場参加と５８名の Zoom 参加があり、総計 220 名もの参加がありました。出版に至るまでの関係者の皆様への感謝が白岩理事長の冒頭挨拶で述べられ、始まりました。その後、編集委員長である堀江武名誉顧問より、「無施肥無農薬の作物栽培の意義と出版に至る経緯」と題した基調講演がありました。出版に至る経緯に続けて、①これまでの調査研究の成果を公表し、環境保全型農業の確立に資すること、②調査研究をレビューし今後の研究課題を明らかにすること、という２つの発刊の目的が述べられました。本著はイネ・クワ・チャの研究を８章で構成し、総勢２８名の著者との２年を超える原稿の提出・修正等の期間を経て、出版社農文協との半年間の質疑応答・原稿修正を終え、本年７月発刊に至りました。無施肥無農薬の作物栽培の７つの意義として、１中庸的な収量が持続的に得られることを実証、２特質の明示、3 経営的持続性の明示、4 栽培法のマニュアル提示、 5 メカニズム仮設の提示、6 環境保全型農業の重要な一役を担いうることを明示、7 今後の調査研究の課題を明示されました。特質については、①環境負荷が小さい。②圃場の生物多様性が高い。③病虫害が少ない。 ④自然災害に強い。⑤高品質な生産物（米は美味しく、クワ葉は蚕の嗜好性が高く頑健性を高め、茶葉は窒素含量が低いが独特の美味しさがある)。⑥植物体は地上部の生育は劣るが根がよく発達し細根が多い。⑦ケイ素を除き植物体の無機成分含量は低く、病虫害や災害に強いことを説明されました。その後、無施肥無農薬栽培の生産性・持続性を支えるメカニズムの仮説を説明され､今日的意義について､深刻化する地球環境問題への対応が求められる中、無施肥無農薬栽培は今後農業の重要な一躍を担いうる農法であると締めくくられました。



堀江武名誉顧問

基調講演の後からは、書籍の著者である６名の方の講演がありました。丸田さんより無施肥水田の稲の特徴と栽培技術に関して、本間副理事長より無施肥水田の生態系に関して、下野先生より長期無施肥水田の雑草叢の特徴に関して、上西先生より無施肥無農薬の稲作経営の持続性に関して、多田理事より無施肥栽培のクワの量と質に関して、白岩理事長より無施肥茶園の収量・土壌・食がありまし


丸田氏



本間副理事長


下野先生



上西先生


多田理事



白岩理事長

た。また書籍の販売も行なわれ、４２冊も購入いただきました。堀江名誉顧問、白岩理事長、本間副理事長の３名の先生方のサイン会も行い、４０名程の長蛇の列ができました。

総合討論では、会場から質問や活発な意見をいただきました。コメの生産者から無施肥無農薬栽培には未来があり、栽培技術があるので、普及をしたいこと、国や公的機関へ働きかけていく必要があると言われ、複数の参加者から同様の意見がありました。慣行栽培では効率的な多収技術の議論が一般的であるなか、環境負荷に対する意識を高めて、認知度を上げて普及していく必要性があるとの意見もありました。収量を減収させないために、雑草管理をどのようにするかとの質問に無肥研スタッフから、回答がありました。研究者より、手間暇がかかることを価格に反映させて販売する時に、消費者の理解をどのように得るのか、その方法としてストーリー性を持たせて、このお米を食べることで将来世代にどのようなインパクトがあるのかや、学校での食育授業や農業体験を通して価値を伝えていく等のアイデアを提供していただきました。クログワイとオモダカの除草方法の研究のお願い、研究者の立場から行政や政府に無施肥無農薬栽培を広報する方法があるかとの質問に、白岩理事長から、個人的な意見ではあるけれども、無施肥無農薬栽培をされる方の動機は、自然や社会に対する強い信念があってされる方が多く、トップダウンではない形で生産者が増えていき、じわじわ広がっていくのではないかと回答がありました。無施肥無農薬栽培の面積をなぜ増やしたのかの質問に対して、生産者よりお米が売れることに加えて、肥料なしでなぜここまで育つのか、栽培していて面白いからですと回答され、メタンガスの発生度合いを業者に測定してもらうと、無施肥水田では極端に少ない事が環境へ貢献していると情報提供がありました。消費者の立場からの意見では、有肥のお米は翌年夏頃から極端にまずくなるのに対して、無施肥のお米は２年後でも味が落ちずに美味しいことから劣化しにくいと思われるので、玄米での食味の結果だけではなく白米での劣化についても、調査研究を希望するという意見がありました。需要の拡大に関しては、流通業者から無施肥無農薬栽培米の抗酸化力を以前調べた時に１．７倍高い結果が出ていること、普及に関しては、HP より Instagram にアップする方が早く広がっていくこと、現在所得格差が起こり景気が悪く客数が減少し消費が冷え込んでいるが、所得の高い層の方は購入しており、またそういった意識の高い層からは「本当に無施肥ですか」という質問もあり、無肥研には認証制度があるので、安心して購入してもらえると話がありました。また本著の出版社でもある農文協で、肥料を使わないフェアがあるのを追い風に


総合討論

して楽しく明るく表現して広めていきましょうと提案がありました。豆腐屋の「久在屋」東田様より、食に意識のある人は生産地がどこなのか、凝固剤は何を使っているのかなど質問をされるので、もっと消費者に知ってもらう必要があり、大型商業施設でも販売し、無施肥無農薬栽培が普及されることを願っていると言われました。消費者の立場で普及のためにできることは何かとの質問に、自然食品店や百貨店などで販売員に無施肥無農薬の野菜は売ってないですかと聞くことで、無施肥無農薬野菜を仕入れて販売しようという切っ掛けになることがあり、普及につながっていくと回答いただきました。また、生産者・流通業者・消費者の繋がりから相乗効果が生まれることや、アレルギーの症状が軽くなること、無施肥農家は体に良い物を提供できる長所があるなど、様々な意見が出ました。 最後に、講演者から一言ずつまとめのメッセージを頂き、シンポジウムは大盛況で終わりました。

懇親会では、堀江名誉顧問の挨拶で、書籍発刊にご協力いただいた農家、圃場提供者、研究者、執筆者、寄付者への感謝が述べられ、乾杯の後１０８名の参加者が、南禅寺瓢亭の食事をいただきながら和やかに歓談しました。歓談の途中には、巌田建商店の巌田建様より、懇親会で使われている無施肥無農薬栽培の食材について説明がありました。また、瓢亭の副料理長様より、無施肥無農薬栽培の食材は香りが強い、素材本来の味が強く、味付けしやすい、旨味は無施肥無農薬栽培の土の力から出ているのだろうと感想をいただきました。また、「久在屋」の東田様より、美味しい豆腐は美味しい豆からできる。その元は日本の美味しい土の力があってこそだと話されました。京大教授の桂先生より無施肥無農薬栽培の理念のわかる人と一緒に研究と普及を進めていきたいとのお言葉で有意義な懇親会を閉会致しました。


懇親会

（NPO 無肥研　利根川雅子）

★　今後の行事予定

NPO 無肥研農産展　2026 年 11 月 15 日（日）

北海道から沖縄まで、全国各地で活動されている無肥研会員の皆様が丹精込めて生産された農産物を一堂に集め、展示・販売いたします。また、講演会や懇親会も開催いたしますので、皆様お誘い合わせのうえ、ぜひご参加ください。

農産展　12:30～14:45　入場料：無料
講演会　15:00～16:15　参加費：500 円（オンライン参加：1,000 円）
懇親会　16:30～18:00　参加費：4,500 円
※講演会・懇親会のお申し込み締め切りは、11 月 10 日（火）です。
お申し込み忘れのないよう、お願いいたします。
（詳細は無肥研ホームページをご覧ください。）

会報についてのご意見を、郵便、FAX、E-mail でお寄せ下さい。皆様のお力で会報を充実させていきたいと存じますので、ご協力のほどお願い申し上げます。
（編集担当）

〒606-8311　京都市左京区吉田神楽岡町106-2
【認定ＮＰＯ法人】特定非営利活動法人 無施肥無農薬栽培調査研究会
事務局　TEL：075-751-0347　FAX：075-334-8058
E-mail：bureau@muhiken.or.jp　URL：https://muhiken.or.jp
Facebook：https://www.facebook.com/muhiken